



中央民族大学
MINZU UNIVERSITY OF CHINA

中央民族大学交換留学

法文学部人文学科

河野 竜兵

はじめに

法文学部人文学科 4 回生の河野竜兵です。私は、3 回生の後期・4 回生の前期の 2 学期の間、中国北京にある中央民族大学という協定校への交換留学に行っていました。ここでは留学報告を兼ねて、「留学動機」「留学先選択の軸」「留学での収穫」「辛かったこと」の 4 つのテーマについて簡単に述べていきたいと思えます。興味のある項目だけでも、目を通していただくと幸いです。

留学動機

『なぜ中国に留学しようと思ったのか。』この質問はこれまで数え切れないほど投げ掛けられました。主な理由は 2 つあります。一つは、「より多くの人とコミュニケーションが取れるようになりたかったから」、もう一つは「近いけど知らないことの多い中国を自分自身で体験し知りたかったから」です。

前者に関して、まず前提からお話しします。3 回生の夏から 1 年間の留学に踏み出した私が、中国語の学習を開始したのは、3 回生になる少し前のことです。それまでは、米国交換留学を目指し、海外経験を積みつつ英語学習に励んでいました。しかし、英語での国際交流の経験を通し、自分にとって「英語ができるようになること」は、「目標」ではなく、言語の壁を乗り越えて人と関わり、新しいことを知るための「手段」に過ぎないのだという気付きを得ました。そこから、英語力の完璧さを求めるよりも、より多くの人とコミュニケーションを取るため、更なる「手段（言語）」を手に入れたいと考えるようになりました。その結果、話者数が多く、アジア圏での使用機会が多いであろう中国語の学習を決意しました。

後者に関しては、以前から感じていたある違和感がきっかけでした。それは、訪中経験のある人/無い人の中国に対する概念の間に、大きな差があるということです。今でこそ中国の経済発展やキャッシュレス決済、シェアリングエコノミー等を認め、支持する人は多くいます。しかし当時中国について周囲の人と意見を交わす中で、訪中経験のある人ほどプラスのイメージを語り、対して訪中経験の無い人ほどマイナスのイメージを持っているということに気がきました。この構図に疑問を抱き、自分の目で確かめてみたいと考え、中国留学という決断を下しました。

留学先選択の軸

数ある協定校の中で、留学先に中央民族大学を選択した理由は、大きく分けて 2 つあります。

1つ目は、標準的な中国語を学びたいと思ったからです。中国は国土面積も人口規模も大きく、方言や訛りは勿論、異なる言語形態も存在します(北京にも方言は存在しますが)。「普通話」を正しく話せる人の割合は、地方に行けば減り、大都市に近づけば多くなるそうです。そこで、協定校の中でも首都北京に所在する中央民族大学を選択しました。仮に皆さんが、標準的な日本語を学びに来日する外国人留学生だとすれば、自然に東京やその周辺に行きたいと考えるはずで、それに近い感覚だと捉えて頂ければ結構です。



2つ目は、生活のしやすさです。交通や気候を例に挙げます。中央民族大学は北京中心部に近く、地下鉄・バス・高鉄(日本で言う新幹線)・飛行機・タクシーに加え、シェアサイクルも至る所で利用可能でした。気候についても、夏でも湿気が少なく、冬でも極寒とまではいかないという北京の気候条件を聞き、安心して渡航を決められました。

留学経験後の今言えることとして、どちらの選択軸も間違いではなかったと思います。

渡航後も、中央民族大学の魅力を沢山発見しました。例えば、「学生の多様性」や「留学生の少なさ」です。

その名の通り、中央民族大学の強みの一つとして、民族学があります。私が面白いと感じたのは、大学が民族学の研究の中心地となっているということではなく、そこで学ぶ学生の多くが、様々な民族にルーツを持っているということです。中国には、識別されているものだけでも、56民族があるとされています。多民族が1大学で一緒に勉強する珍しい環境に身を置けたことは、非常に刺激的で、普通の留学先には無い学びを得られたと感じています。

また、中央民族大学は、留学生数が比較的少ない大学です。留学生同士の繋がりや、現地学生との間にできた繋がり、非常に密なものになりました。各国の学生が入り乱れて過ごすため「日本人で固まってしまい語学力が伸びない」ということは起こりませんでしたし、留学生数に対しての現地学生数が多いので、「現地学生の交流機会が少なく残念」ということもありませんでした。

留学で得たもの

語学力はもちろん伸びました。しかし、私の思う留學生活での最大の収穫は、新しい『人』と『場所』との出会いです。

●『人』との出会い

—日本人—

出遭った日本人学生の中には、中国語、漢文、経済を専攻する学生、中にはフランス文学を専攻する人も居ました。彼らの国内外でのそれまでの経験や、帰国後のライフプランを聞

き、非常に多くの刺激を受けました。

また、縁あって、愛媛県人会という現地社会人の会に参加させていただき、そこでも多くの方々との交流ができました。現地日本人向け情報誌の記者の方、仕事に誇りを持って日系企業の中国駐在員を務める会社員の方々、中国で起業し永住権獲得手続きの最中にある経営者の方、多様なバックグラウンドを持った人からお話を聞き、自らの将来に新しい視座を持つことができました。



— 他国留学生 —

共に留学生生活を過ごした他国留学生たちとの出会いも、もちろん忘れられないものとなりました。同じ国から来た学生の中にも、宗教観や生活背景は多様で、自分の視野や考え方が如何に狭いものであるかを何度も痛感させられました。中には、アフリカにある母国と中国の架け橋を目指し、若くして国の代表として活躍している学生がいたり、ヨーロッパで育ちながらも遠く離れた中国に思いを寄せ、第5言語として中国語を学ぶ学生がいたり、日本でごく平凡な学生生活を送っていた自分には考えられない学生生活を送る学生が多くいました。

— 中国人 —

大学では、親切な先生方や勤勉でフレンドリーな数々の学生たちとの素敵を通し、充実した留学生活を送ることができました。

大学外では、「困ったことがあればウチへ来なさい」と言い、中国行きの飛行機で温かく渡航の不安を解してくれたご高齢の女性、韓国人の友人と行ったサムギョブサル店で「日中韓には古くから強い縁がある、何か困ったら頼りなさい」と言って、連絡先を残し、気付かないうちに私たちの飲食代の支払いまでして店を出ていった会社員の方々、「山口百恵が大好きだ」と熱く語りながら、車内で熱唱し始めるタクシー運転手の方などと出会い、個性豊かで温かく、人間味のある中国の方々の国民性を体感しました。

思い返せば、ここには書ききれないほど多くの素晴らしい出会いがありました。彼らとの関わりを通し、外から見た日本、現地で見ると中国を再認識できました。『反日思想』の存在に多少なりとも不安を抱きながら渡航した過去の自分が恥ずかしくなり、また、何を知っているわけでもないのに、中国や中国人に偏見を抱く人がいる日本の現状を情けなく感じました。



● 『場所』との出会い

留学先の大学が長期休暇の長い学校であるということ、また中国中に張り巡らされた交通網が便利だということから、多くの場所を訪れる機会がありました。

北京市内以外にも、上海、天津、青島、四川省成都、西安等の有名観



光地を訪れることができました。それ以外にも、内モンゴル自治区や青海省、江蘇省の蘇州、杭州、南京等、なかなか日本からの観光では行くことのできない所にも行くことができました。各省、各都市で雰囲気や訛り、文化が異なり、どこに行っても新しい発見があり非常に面白かったです。

●『語学力』

勿論、語学力は鍛えられました。渡航前は、語学の授業の受講に加え、独学も行い、十分な準備をした気になっていました。しかし、留学最初の組分け試験後の私の配置先は、初級クラス(漢字を学ぶクラスの一つ上)で、クラス内での私の語学力は最低レベルでした。授業に付いていくことはおろか、友人とコミュニケーションを取ることすらできませんでした。苦しみながらも、他学生との交流や、学内外の様々な活動に積極参加し、必死に努力続けました。その結果、帰国1か月前の資格試験(HSK)では、目標を大きく上回る成績を残し、同時に、20か国以上の学生との信頼関係構築もできました。

辛かったこと

私自身細かいことを余り気にしない性格であった、現地では沢山の人が助けてくれた、ということもあり、辛かったことは特にありませんでした。

とは言え、何も書かないということではできません。ここでは、現地で生活していて困ったことを二つお伝えしたいと思います。

一つ目は、中国民の持つ大陸IDが無いと、宿泊できない施設や利用できないサービスがあるということです。これは、旅行計画時に非常に悩まされました。お陰で、国民だと格安ホテルの予約がネットで簡単に簡単できるというのに、ネットで見つけた好条件のホテルに、わざわざ電話で外国人の滞在が可能かを確認する、という作業を何十回としなければなりませんでした。時には、電話での確認が取れたからと、安心してホテルに向かったところ、チェックイン時に手続きができないと言われ、他を当たらなければならなくなるということもありました。旅先でチェックイン時の拒否を1日2軒も喰って、宿を求め、町をさ迷い歩く夜もありました。

二つ目は、食事です。「美味しすぎて」困りました。中国には、「南甜北咸、東辣西酸」という言葉があります。甜は「甘味」咸は「塩味」辣は「辛味」酸は「酸味」を表し、これは、中国を東西南北で分けた時の食文化の違いを表しています。旅先では、こうした異なる食文化も体験することができました。また、嬉しいことに、中央民族大学の食堂では、各地の風味を再現した食事の提供もされていました。非常に美味しく、ついつい食べ過ぎてしまうことがよくありました。



終わりに

「中国」と聞くと、あまり良いイメージが無いと感じる人もいます。しかし、皆

さんが報道や SNS で見る情報は、広大な中国のほんの一部分を切り取っただけかもしれません。もちろん、私自身、渡航前に固定概念や先入観がゼロだったとは言い切れませんが、行って、初めて知ることも多くありました。ただ、現地で出会う人、物、場所の多くは、私に感動や学びを与えてくれました。

交換留学に限らず、短期研修や旅行などきっかけは何でも構いません。この文章を通して、私が好きになったこの国に、少しでも多くの人に興味を持ち、訪れてくれることを願っています。